



2005.10.30 発行 : No.50
TEL 03-3985-2628
立教大学図書館

「江戸川乱歩旧蔵江戸文学作品展」 を開催しました

6月10日(金)から12日(日)までの3日間、立教大学太刀川記念館において「江戸川乱歩旧蔵江戸文学作品展」を開催しました。乱歩は推理作家としてだけでなく江戸文学などの近世資料収集家としても有名です。

昨年130周年記念行事として行った「江戸川乱歩と大衆の20世紀展」に続き、今回は井原西鶴をはじめとする江戸文学資料100点ほどを展示しました。

見逃してしまったという方、展示作品について詳しく知りたい方のために、その中から4作品をご紹介いたします。当作品展の図録作成に携わった文学研究科4名の方に執筆していただきました。乱歩の収蔵品を通じて古典世界にふれ、それらが乱歩作品に与えた影響を考えてみるのも面白いでしょう。

江戸川乱歩は1934年から1965年に71歳で死去するまで、立教大学に隣接する住宅に住んでいました。2階建ての書庫兼書斎の土蔵を「幻影城」と呼び、2万点近い資料、蔵書を保管していました。今回も学生、教職員をはじめとする数多くの来場者をもって、盛況のうちに幕を閉じました。

なお、立教大学では、今後も江戸川乱歩関連の企画を予定しています。どうぞご期待ください。



目 次

「江戸川乱歩旧蔵江戸文学作品展」 を開催しました	p 1
乱歩流、古典の味わい方	p 2
不可解なる魅力	p 2
仮名垣魯文作・歌川芳虎画 「童絵解万国囃」	p 3
八文字屋本	p 3
<読書ナビ>12回 英語を学ぶための10冊	p 4

乱歩流、古典の味わい方

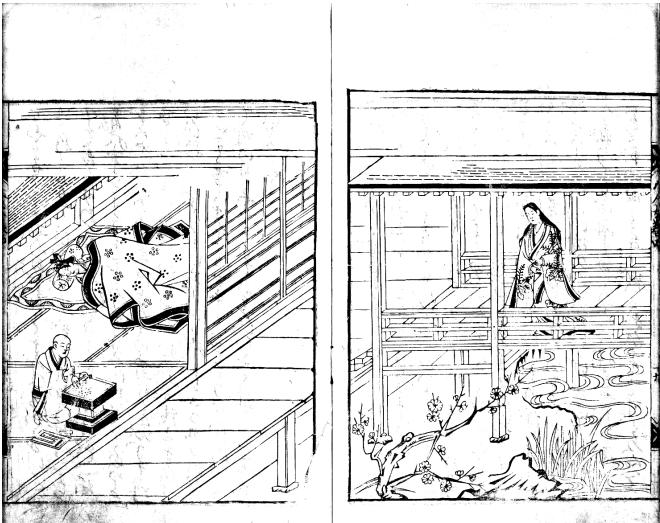
文学研究科日本文学専攻 博士課程後期課程 丹羽 みさと

乱歩には『押絵と旅する男』(昭和4年)という作品がある。この「押絵」に描かれているのは恋人に会うため放火をして死刑になった八百屋お七である。

お七を題材とした物語は多いが、中でも最も有名なものは井原西鶴の『好色五人女』のお七だろう。西鶴のお七は恋人に思いの丈を告げるため、雷鳴轟く深夜、ひとり寺の中を忍び行く情熱的な少女として描かれている。普通お七といふと、このような行動的な人物とされているが、乱歩のお七は全く逆である。

「押絵」は紙芝居の様な一枚絵に布を張り合わせて立体感を持たせたものであり、その絵自体が動くことはまずない。つまり乱歩のお七も同様である。にもかかわらず彼女は一瞬で生身の男性を魅了し、相手の人生を狂わせてしまう。

『押絵と旅する男』は幻想的な世界観のみで語られがちであるが、能動的かつ加虐的な西鶴のお七と相反する乱歩のそれに焦点を当てるとき、乱歩が典型的なお七を味わった上で、新しいお七像を造り出していたことがわかる。必ずしも乱歩が『好色五人女』を参考にしていたとはいえないが、お七の雛型ともいえる西鶴作品を乱歩が手中に収めていたということに、深い興味をそそられる。



「不可解」なる魅力

文学研究科日本文学専攻 博士課程前期課程 細谷 朋子

乱歩は多くの手妻本を所有していた。手妻本といつても、その内容は手妻（手品）の解説に限らず、およそ「不思議なこと」は全て取り上げられているといつても過言ではない。「不思議なこと」の解説が手妻本の眼目であるから、明治になると当然『西洋てじな』、といった西洋の文物やマジックを扱った作品も登場する。

写真上段の作品は『和国智恵較』、碁石拾いなど数字パズルの問題集である。下段左『さんげ袋』は手品のトリック解説集で、写真に見えるのは影絵の種明かし。そして下段右は『饑訓蒙鏡草』という作品で、カラクリ人形の仕組みを紹介した本である。パズル、影絵、カラクリ。ジャンルの異なるこの三作品の著者は、なんと同一人物なのである。その名、多賀谷環中仙。タガヤカンチュウセン、そもそも彼は何者か。



じつは彼、手品師でも人形遣いでもなく、和算家といわれる数学のプロであった。勿論、本業である数学書も書いている。『初心算法早伝授』の自序によると、名古屋生まれで本名は不破仙久郎、京都に住んでいたらしい。

言われてみれば、『和国智恵較』のパズルはなかなかに難しい。数学的である。しかしながら和算家の彼が、影絵の指南をしてみたり、はてはカラクリ人形を分解解説しているのか。手品や影絵やカラクリといった世に溢れる「不思議なこと」が、彼の興味を引きつけてやまなかつた…だとしたら。

手妻本ハマった乱歩を見ても、「手妻にハマった数学学者」という不思議な存在を追いかけている私を見ても、今も昔も、「不思議なこと」はどうにも人を惹きつけるらしい。

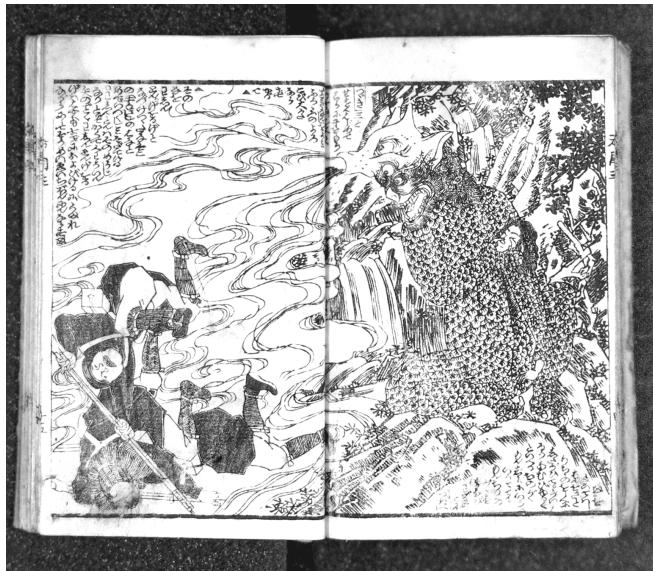
仮名垣魯文作・歌川芳虎画
『童(おさな)絵(え)解(とき)万国(ばんこく)嘶(ばなし)』文学研究科日本文学専攻 小林 実
博士課程後期課程

アメリカ歴代大統領が巨大怪獣とたたかう大スペクタクル・アクション! ——とは、どこかのB級映画の企画にあらず。乱歩旧蔵『童絵解万国嘶』の筋である。

浦賀に来航したペリー提督を天狗づらにえがいた日本では、初代大統領ワシントンは虎退治をし、二代大統領アダムスは仙女のたすけをかりて大蛇を倒したことになっている。

これをバカバカしいと侮るようでは、江戸の文化を堪能する資格は半減する。

日本の開国とともに「夷荻」の実態を研究しはじめた——というのは、まじめな人たちのはなしで、長屋の熊さん、



八つあんを動かしたのは、むしろ強烈な好奇心と、そこからわく空想力であった。

本書をひもとくと、はじめの初・二編は、フランス、イギリスの地理的紹介、ロシアのピョートル大帝の伝記が書かれており、当時でていた海外事情の紹介書を切り貼りしたものだとわかる。しかし、第三編にいたると突然、口絵に棍棒をもって三つ頭の龍にたちむかう男の姿。さらに丁をめくっていくと、全身鱗の怪獣が毒ガスを吐き、巨大な怪鳥が空を舞う!? 東宝映画か円谷プロか……。序文で作者は「寓言架空の説を設げず」といはっているが、まっかな嘘である。

ネタをさぐれば、先行する合巻本や『水滸伝』などから案を借りてきた、まさに江戸庶民の空想力の集大成だとわかる。その壮大なファンタジーは一見の価値があろう。

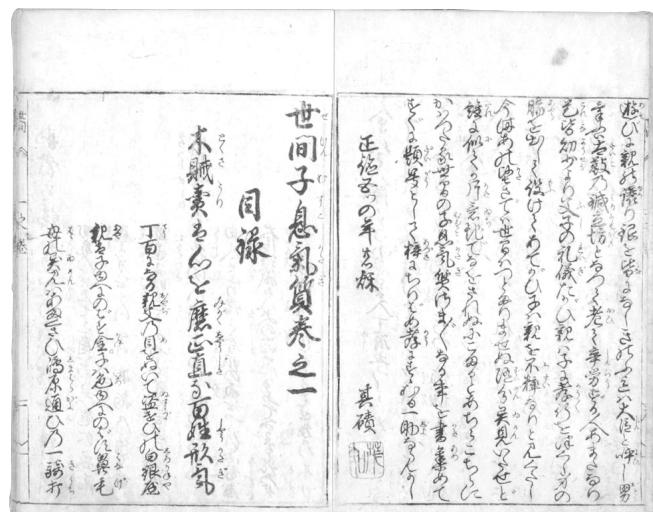
幕末は、坂本龍馬ばかりがロマンではないのだ。

「八文字屋本」

文学研究科日本文学専攻 加藤れん
博士課程前期課程

「八文字屋本」とは八文字屋という書肆の刊行による浮世草子をいいます。また作者が江島其磧（1666～1735）と多田南嶺（1698～1750）で他の書肆より刊行のもの、広義には同時代・同傾向の浮世草子を指します。町人や遊里の生活を滑稽に描くものがほとんどで、たとえば今回の江戸川乱歩旧蔵書展でもご覧いただいた『世間子息氣質』は、正徳5年（1715）に刊行された5巻5冊からなる作品ですが、さまざまに写実・誇張された息子の性格（気質）を描いた15

話を収めるものです。医者の真似事をして周囲を困らせる息子、和歌を詠むことに夢中になって身上をつぶす息子、父親と共に占いを生業として貧乏をする息子など、苦笑を誘う小編ばかりです。「八文字屋本」は挿絵が多く、また書型も横長の「横本」とよばれる独特の形をしています。そして個人が藏して読むほか、それぞれの本に残された貸本屋の印からも分かるとおり貸本として広く読まれた種類の本です。そのため、一般に「八文字屋本」には手垢や書き込みの無数に残されたものが多く見られるのですが、乱歩旧蔵本のそれらは大変に保存の状態が良く、きれいなものを選んで集められたものと考えられます。乱歩の蒐集した時代においても、これほど良好な状態の「八文字屋本」を揃えてコレクションすることは容易ではなかったと考えられ、実に稀少な資料群だといえます。



「英語を学ぶ」と一言で言っても、実用のために学ぶのか、英語の言語体系を学ぶのか、英語教育ために学ぶのか、あるいは言葉の面白さを知るために学ぶのか、などなど多様であり、その切り込み方も言語学、コミュニケーション学、歴史学、人類学、英文学など様々である。それだけ言葉というものが私たちの文化にあらゆる面で関係しているということであるが、ここでは「英語とはどのような言葉なのかについて学ぶ」と一般化してお話ししてみたい。

ある言語を理解するためには、その言語の「文法」と「語彙」を知ることが先決であろう。文法書と言えば *A Comprehensive Grammar of the English Language* (1985) である。この文法書はコンピュータを使って大量の英文を統計処理したデータ（コーパス）を基にして書かれているという点でも画期的である。日本で書かれている英文法書の多くは、この本に基づいているといつても過言ではない。*Longman Grammar of Spoken and Written English* (1999) はコーパスの分析結果を前面に出した文法書であり、どの用法がどの分野で一番多く使われているのかが一目瞭然にわかる文法書である。*The Cambridge Grammar of the English Language* (2002) は最新の理論や考え方を多く取り入れたバランスの取れた文法書である。

英語の語彙を知るのであれば *Collins COBUILD English Dictionary* が一番である。この辞書はコーパスを使った辞書作りの歴史そのものである。この辞書の「まえがき」部分は、現代の語彙論、辞書学を知るうえでも読み応えがある。日本人が英語の語彙を理解しようとするとどうしても問題となるのは、日本語と英語の意味のずれである。この点を面白く解説しているのが『日本の意味 英語の意味』(1988) である。著者の小島義郎は長年辞書作りに携わっており、この問題と日々格闘してきたと言ってもよい。森住衛の『単語の文化的意味 friend は「友だち」か』(2004) は題名どおりの本であり、読んでいて興味が尽きない。先ほどから出ているコーパスとは何か、コーパス言語学とはどのような学問なのかを知りたければ、『英語コーパス言語学 基礎と実践』(2005) がよい。日本のコーパス言語学をリードしてきた研究者たちによる最新の入門書である。

最近は、「言葉を理解するには、その言葉が社会においてどのように使われているのかを理解する必要がある」と盛んに言われるようになった。この分野で初期に出され、簡単に読めて面白いのはネウストプニーの『外国人とのコミュニケーション』(1982) である。著者自身が世界をまたにかけて活躍する外国人であるが、日本語・日本文化の視点から英語の語用論、会話分析、教授法まで幅広く扱っている。Peter Trudgill著 土田滋訳の『言語と社会』(1975) は社会と言語の関係を理解する古典的な名著である。原著の *Sociolinguistics: An Introduction to Language and Society* は1983年に改訂版が出されているが、読みやすく面白い本である。

最後に、中島文雄の『英語学とは何か』(1991)をお薦めしたい。文庫本であるが、近代の言語学者の諸理論を文献学の立場から包括的に扱っており、言葉とは何かという問題が近代においてどう研究してきたかがわかる名著である。渡辺昇一の巻頭言は、21世紀の「知の時代」を生きて行くよい指針となるメッセージである。

※文中にあげられた資料は全て立教大学図書館で所蔵しています。

開館日程等については図書館のホームページでご案内しております。

(<http://opac.rikkyo.ac.jp>)

※その他変更がある場合はその都度、掲示でお知らせします。